(3) エレベートバス用担架の改良

国立療養所西多賀病院
佐々木　勝　吉　　森　田　昭　一
佐々木　秀　子　　半　沢　　寛
田　中　常　男　　小　山　勝　次

昭和49年より、重症心身障害児用のエレベートバスに種々改良を加え、成人ＰＭＤ患者用として使用してきたが、今回は特に担架部分に改良を加えてみたので報告する。

＜目　　的＞

職員の腰痛予防と限られた時間内での入浴能率をあげ、患者の安全を考慮し容易に入浴できるように援助する。

問題点

① 患者が担架に臥床し、浴槽に入った場合、体が変形しているため、胸部が湯面より浮きでて十分にあたたまらない。

② 担架に臥床した時、筋力が弱いためと体が変形しているため担架に体の曲線が添わず不安定である。

③ 担架の坐台が硬いため、体の一部分だけに力が入り、疲れやすく、又、苦痛を感じる。

改良点

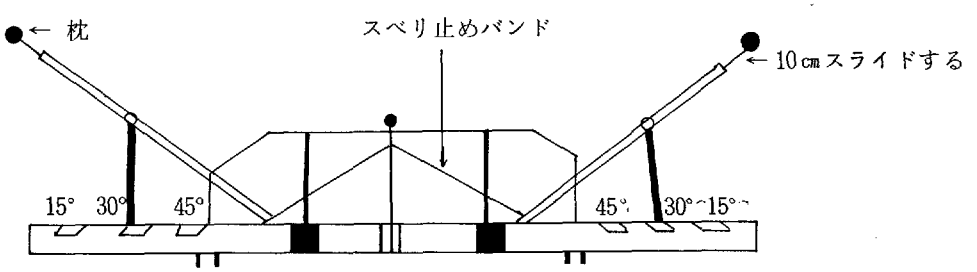
① 全体をナイロンキャンバスにした。

② 40度だけのリクライニングを、45度、30度、15度とおおくした。

③ 45㎝の長さの背台を55㎝～65㎝とスライドできるものにした。

④ 殿部に固定操置を取りつけた。

⑤ 枕をとりつけた。



改良結果

① ナイロンキャンバスにより体に密着する範囲が多くなり、背部の空間も少なく、疲労や苦痛が軽減された。

② 背台の調節によって、1人1人の変形や、坐高に合せて入浴できるようになった。

③ 殿部の固定操置によって、浴槽内での不安が除去され、頭や胸をおさえての介助を必要としなくなり、3人での介助であったものが、2人介助ですむようになった。

④ 枕のとりつけにより、頭部、頸部の安定が保たれ、安心して入浴できるようになった。

⑤ 胸が少しても、湯にしずむように、リクライニングを45度、30度、15度とおおくしたが、45度、15度は全く使用することなく、30度のみを使用している。できれば、35度、30度、25度ぐらいのリクライニングであれば良かったのではないかと思われた。

＜おわりに＞

当病棟での入浴手順は、湯に入ってあたたまり、洗い台にて、体を洗い、又湯に入ってあがるといった手順をとり、現在、エレベートバスと、普通浴槽を併用し、2時間内で、約36名の患者を、平均10人の介助者で行っている。そのうちエレベートバスは、体重の重い患者、変形が強度で支えの必要な患者を介助者2名で8名、普通浴槽で平均介助者8名で28名を入浴させており、介助者1人当りにすると4：3.5 人とエレベートバスが多く介助している。そして、患者の入浴過程において、今までの浴槽であれば、6回の拘きかかえがエレベートバスでは2回で済み、したがって腰痛予防にもつながるのではないかと思われる。しかし、これ以上の能率を望むには、洗い台で、体を洗ってあがり湯に入るといった手順に変えれば、作業能率をあげることができるが、現在の入浴習慣を変えることは、大変むずかしいと思えた。

14) ベット柵の安全性の工夫について

国立療養所東埼玉病院
桧山豊子　早川洋子
甘田里美　甲斐里美
高野千秋

当病棟ではS.49年6月に開棟され現在入院患者数は36名である。その年令構成をみると6才～15才迄で、10才以下が23名と過半数を占めている。PMD児が特に転倒及び転落をしやすいという危険性に備えて現在使用しているスタンダード、小児用、電動ベットには柵が準備され必要に応じて、すぐに使用できる様になっている。しかしこのベット柵はステンレス製のパイプで出来ておりベット上で遊ぶ事の多い年少児、又は障害度に伴いベット生活の長くなる年長児らが、体の支持バランスを崩した時に打撲の危険性がある為、その安全を期する危険防止の方法として1つの試みを工夫してみた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昭和 49 年より、重症心身障害児用のエレベートバスに種々改良を加え、成人 PMD 患者用として使用してきたが、今回は特に担架部分に改良を加えてみたので報告する。

<目的>

職員の腰痛予防と限られた時間内での入浴能率をあげ、患者の安全を考慮し容易に入浴できるように援助する。